
魔法先生ネギま ~最強最悪の転生者~

RYO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま～最強最悪の転生者～

【NNコード】

N4433P

【作者名】

RYO

【あらすじ】

とある神様の手違いにより死んでしまった主人公、春風竜輝。彼はそんな神に対して怒つたが、何でも願いを3つまで叶えてやると聞いてチートな能力を貰って魔法先生ネギまの世界に旅立つ。さあ、彼は旅立った世界でどのように過ごすのか乞うご期待。

竜「さてさて。どのようにして正義の魔法使いやネギを痛めつけるか。

それを考えるのが楽しみで仕方ないよ。」

プロローグ

その日俺は知らない場所で田を覚ました。

「何処だ、ここは？俺は普通に家で寝ていたはずなのに。」

何だ、ここは？と考えていると俺の田の前に髭の生えたおっさんがないなり現れた。

「マジ、すこまっせんでした……！」とおっさんがいきなり土下座をしてきた。

「えーと、何してんだおっさん？あと誰だんた？」と俺はいく普通に聞いてみた

「ワシはお主たちの世界でいう神と呼ばれる存在じゃ。そしてなぜワシが土下座をしているのかといつと、ワシがお主を間違えて殺してしまったからじや。」と、神と名乗った人物はそう答えた。

「へえ～～。俺って死んだんだ。」俺は特に気にしてないところに答えた。

「～～、怒らんのか？お主は本来まだ死ぬはずではない運命なのに死んでしまったんじやぞ？なのになぜ、～～」

「いやや。元々いた世界には特に興味がなくてさ。友達もいないし、家族も俺が小さい頃に死んじまつたしな。唯一友達と呼べたのは漫画や本だけだったし。」俺はまだ生きていたことと思い出してみた。

「ああ、そういえばまだ読んでない本や読みたい漫画がた

くせんあつたなー、と俺が残念な気持ちに漫つてこむと、

「よし、ではお主を好きな世界に送つしゃべり。」と神がいつてき
た。

「マジで? いいのか?」

「つむ。もとはといえばワシがお主を殺してしまつたんだじゃ。これ
くらこは当然じやう。あと3つほどお主の願いを聞いてやるわ。
とその前にお主の行きたい世界は?」

「魔法先生ネギまで。んで願い事は見た技をすべて使えるようにな
してくれ。次に魔力と気を近衛木乃香の5倍にしてくれ。最後は体力
と知力を今の倍以上にしてくれ。」それと、と付け加えて、
「俺を鍛えてくれ。」

「なぜじゅ?」と神はきこってきた。

「こきなうこんな力を貰つてもちゃんと使いこなせるかわからんか
らだ。」

「ふむなるほど。わかつたでは修行の場へ行こうか」

「おうーよひじくたのむぜー!」

「それから5年後

「ワシが教えることはすべて呑き込んだ。この力をどうつかは
主しだいじゃ。」

「ああ、ありがとう。じゃあそろそろこづか。」長かったなあ、修

行。何回か死にかけたり（いや、まあもう死んでんだけどね）、力をつまく操れないで何回か暴走したりしたしな。でもまあいろんなことを教えてもらつたからこれぐらいは軽いもんなんだがな。調子にのつてオリジナル魔法とか考えちゃつたし。さて思い出に浸つてないでさつさといきますか。

「じゃあな、神様。」

「その前にお主にこれを渡しておく。受け取れ。」といって神はそれをわたしてきた。

「なんだ？これは？」と受け取ったものみてみるとそれはきれいな赤色の刀身をした刀だった。

「それは『竜刀・紅竜』だ。竜の力が詰まつた最強の刀。使えば使うほどにどんどん進化するんじゃよ。」

「ありがと。こんないい刀をくれて。じゃあ改めて行くぜ、じゃあな。」そういつて俺はネギまのせかいへと続く扉を開ける。

「また逢えたらあおつか。春風竜輝！」

「ああ、あんたも達者でなー。」やつひひて俺はネギまの世界へ飛び込んだ。

プロローグ（後書き）

何か表現がおかしいなと思つたらメッシュページください。
一作目ですけどよろしくお願いします。

主人公設定

名前：春風 竜輝

性別：男

容姿：髪は銀色のショートヘアで、目は赤色。black cat の主人公トレンインに似ている（ちなみにこの容姿は前世のときと一緒）

年齢：14歳

身長：175センチ

誕生日：12月8日

趣味：読書、素振り、ギターを弾きながら歌うこと

性格：冷静沈着で周りに流されない。キレるとたまに一方 行みた
いになるときがある。

発動キー：エルテス・キラテス・ドルクネス

竜刀・紅竜の技

一の太刀：紅蓮衝撃破（ブリー・チの月牙天衝みたいな技）

二の太刀：激昂竜撃刃（怒れた竜の如く相手を斬りまくる）

三の太刀：紅竜昇天斬（竜が空に上がるかのように空に向かって思

いつきり切り上げる（

四の太刀・紅蓮消滅破（紅蓮衝撃破の上級の技。どんなものでも消滅させることができる）

五の太刀・???????

六の太刀・???????

七の太刀・???????

八の太刀・???????

オリジナル魔法

一つ目・この世に存在するものをすべて破壊し、一から創り直せ
神の一撃「アンド・ブレイク」「アンド・ジャッジ」

二つ目・神々に背きし者どもに、今こそ神の鉄槌を 神々の裁判「インフィニティ・ダーティ・ダークネス」

三つ目・我に仇名す者たちに、無限の絶望と恐怖を与える 無限の闇

* オリジナル魔法に関しては本文中で解説しますのでご期待ください。

主人公設定（後書き）

紅竜の技やオリジナル魔法の名前は募集中ですのでどんどん送ってきてください。
楽しみに待つてます。

第一話（前書き）

更新遅れました。すいません。

第1話

「お? やつとついたか?」俺は神のいたところにあつた扉をぐぐつてここまで歩いてきた。

「それにして、何がどうだ？」と俺が思つてゐると、「ドン！」
と何かにぶつかつた。何だ？、と思つてみてみたらそれは、鬼
ごつむ。

「なんや？ 兄ちゃん。この学園の魔法使いか？ まあ、違つても殺さなければアカンがな。ちゅう訳で死ねや兄ちゃん。」とその鬼はいきなり腕を俺に向かつて思いつきり振ってきた。普通の人間であればこの一撃だけで死ぬだろう。

最初の音は紅竜で腕を斬った音、
ザシユー！ー、ー、ー、ー、ゴトッ。

最後に聞こえたのは斬った腕が落ちる音。

「グッアアアアあああああああーーー！」と鬼は斬られた腕の部分

「おー、ひむせーぞ。腕を斬られた程度でそんなでけえ声出すな。」

「ああああああああ……」と鬼はまだ声をあげているので、

「あ～うつせ。もう死ね。お前。」と俺は鬼の頭に紅竜を刺した。刺して少しだつてからその鬼は消えた。

「そういうえばあの鬼、この学園って言ってたからこには麻帆良で間違いないみたいだな。だとしたらそのうち誰かに会える」「おい。そこの兄ちゃん。」「あ？ なんだ」と後ろから呼ばれたの後ろを振り向いてみると、そこには鬼の大群がいた。

「や！」にさつときまでいた鬼を殺したのはお前か？」と鬼の中でもひときわデカイ体をした鬼が前に出てきて俺に聞いてきた。

「だとしたらどうする？」と俺は刀を鞘に戻しながら言つた。

「はっ、知れることを。、、「殺せエエエ……」とリーダー格の鬼はほかの鬼たちに命令した。その瞬間にほかの鬼たちが俺に向かつってきた。

「、、、、、相手の力量も測れないで突っ込んでくるなんてな。鬼ってのはバカなんだな。」と俺はつぶやいた。そして俺はちいさな声で詠唱を唱えた。

「エルテス・キラテス・ドルクネス 神々に背きし者どもこ、今こそ神の鉄槌を 神々の裁判！」

俺が詠唱を唱え終わつた瞬間にいくつものデカイ雷が俺に向かつて

きた鬼たちに落ちた。もちろんその鬼たちは一瞬で塵に変わった。この技は自分自身で対象と決めたものに雷を落とす技。雷の力でかさや威力は自分で決められることができる。

「な、な、あれだけの数の鬼たちを一瞬で、、、」

「おい、よそ見してていいのか？」

「は！」リーダー格の鬼は俺が懐まで移動しているのに気付かなかつた。鬼は急いで後ろに下がつて距離を取ろうとするが、、、「

「遅え！…三の太刀 紅竜昇天斬！！！」俺はその鬼を思いつき切り上げる。そしてその鬼は縦に真っ二つに切れて地面に倒れた。そして少したつてからその鬼も最初に殺した鬼と同様に消えていった。

「さてこれで鬼たちは消えたし、さつさと人探しに行く」「おい！そこのお前、止まれ！！」今度はなんだよ一体。」と俺はそこでもた後ろを振り向いた。そこには刀を持った少女と銃を持った少女が立っていた。

「貴様、いつたい何者だ！！」と刀を持つた少女が聞いてきた。

「何者って言われても、ちょっと強い一般人？」

「いや、私たちに聞かれても、、、「と銃を持つた少女が答えた。

「ふざけるな！…いいから答へう！…」

「おお～怖い怖い。そんなに殺氣出しながら言つなよ。」と俺はお

ちゅくりながら答えた。

「貴様、ヽヽヽヽ！」とからて殺氣を強くして来た。

「やめる、刹那。その君、私たちに交戦の意思はない。とりあえずついてきてくれないか？」

「な、ヽヽヽ！本氣が龍宮ー？あんな不得体のしれない男を連れていくなんてー？」

「ああ本氣だよ。」

俺を学園長のところまで連れていいく気か、ヽヽおもしろい。

「わかった。あんたらの指示に従おう。」

「感謝するよ。じゃあ私たちひこてきてくれ。ほらこぐれ刹那。」

「くそ、ヽヽ。わかった。」

「ひこて俺は転生して早々にあの妖怪人間に会うことになるのである。

お知らせ

この小説の今後の展開がうまく練れないで新しく作り直そうかと思います。このような小説を見てくださった方々には本当に感謝しています。そして今度はどのような人が見ても面白いと思われるような作品にします。あと新しい小説はどのようにするのかというのはもう決まっているので今週中には投稿できると思います、それと次の作品のヒロインは「戦場のヴァルキュリア」でオリキャラのヴァルキュリア人を出そうと思います。おかしいだろ、それは、とう方は「」意見をください。それでは新しくした魔法先生ネギま～最強最悪の転生者～で会いましょう。では！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4433p/>

魔法先生ネギま ~最強最悪の転生者~

2011年2月24日01時21分発行